

教区御遠忌テーマ

今、いのちがあなたを生きている  
**流罪からの出発**  
-私はどこで生きているのか-

高田教区報

# 響流

第122号

発行所 上越市寺町2丁目24-4  
真宗大谷派 高田教務所  
編集 響流編集委員会  
発行 杉本了恵  
印刷 サクラ印刷(株)



第28回高田教区青少年キャンプ (2011年8月22日～24日)

## 第二十八回高田教区青少年キャンプ

青少年キャンプ実行委員長 **桃井正尊**

本年の青少年キャンプは、新井別院にて参詣し開会式後、池の平青少年センターに移動し実施されました。参加者五十一名、スタッフ六十名以上の多くの方々より、「チャレンジ二〇一一 大空と湖と大地で・・・!! 鳥たちの気分を風を感じてみよう、魚たちの気分で水に漂ってみよう、虫たちの気分ですらに触れてみよう、私の力となかまの力を発見しよう」のスローガンのもと、三つのコースの中から選んでチャレンジをしてみました。

コース① ゴンドラに乗って雄大な空と妙高山景の山々、眼下に広がる東山連峰の景色、ブナの原生林、そして源泉より流れ出る温泉の足湯。

コース② 野尻湖にてカヌーに乗り弁天島から対岸までのチャレンジ。  
コース③ 大地の癒し、大地の恵みの中で野菜つみ、蜂についてのお話、蜂蜜の採取、壮大な苗名滝へ。

と、色々なことに挑戦をしてみました。それぞれが体験を通して、自分自身の命、動物の命、植物の命、自然のいとなみの中から、わたしがどう生かさせて頂いているか、小学校二年生から高校生までとなり年齢差のあるなか、二泊三日の協同生活を通して、一人一人がこの体験をどう受けとめて、これからの人生のページとして残していくか考える機縁となることを願っています。今回はあいくの雨ではありましたが、参加者の皆さんにケガもなく元気であったことが何より安堵しております。

これからもこのキャンプが各地域の方々のおすすめのアイデアにより続けられることを願いつつ、この度のキャンプのために昨年より幾度の会議をもちスタッフ長さんをはじめ多くのスタッフの皆様より御協力、御尽力を賜わり無事に実施、終了しましたことを厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

# 新年度挨拶

高田教務所長 杉本 了恵

宗祖御遠忌を終えた今日、東日本大震災からの復興と、福島第一原子力発電所事故の終息が心から待たれる今日にあって、教区人各位にはいろいろな想いを抱かれるなか、新年度をお迎えになったことと拝察いたします。

新年度に際してのご挨拶ということで、おそらくは本年度の宗務の方針などを書き留めるべきなのでしょうが、それらは、今年度の教務所長巡回の資料としてご寺院、組門徒会員各位にお配りした「高田教務所報」に認めてもおりますので、そちらをご高覧いただくこととご容赦ください。

さて、先の教区内ご門徒にも被害を与えた集中豪雨による水害。現在、教区内からは被害報告を得てはいないものの、人命をも多く奪った台風十二号による災害。今夏、連日のように報道された局地的豪雨。前号には、「これは自然がもたらした現実であり、結果であり、問いは人間へと向けられていることを、はつきりしなければならぬ」と思っている。そうでなければ、おそらくは自然を

支配することのみ心奪われ、自身を、生活を問うことなどないのである」と書かせていただきましたが、こうした一連の自然がもたらす脅威に、いよいよその想いを強くしていきます。

そのことに関係もするのですが、前掲の「高田教務所報」でのご挨拶で、「日本は今、保守的現状復帰を目指しているように思えてなりません」との一文を載せたところ、「もう少し詳しく話してほしい」とのお声もいただいていることから、今回はその想いを書かせていただきました。

「香山リカの『こころの復興』で大切なこと」とのタイトルで、精神科医である彼女がネット上に、エッセイを連載しています。「AKB48のブームは持続するのに、なぜ被災者支援は持続しないのか」など、二十弱ある連載のなかに、「起きてしまった現実を『なかったこと』にして、乗り越えられるのか」という一文があります。一部を紹介すると、「日本人は、これまでも『なかったこと』にする態度をとり続けてきました。小泉自民党を熱狂的に支えた人が、そんなことなどなかったかのように鳩山民主党政権を誕生させ、それさえもなかったかのように民主党批判を展開しています。投票した

自分にも責任があり、叱咤しながらも支え続けるという考えは微塵もありません。さかのぼれば、明治維新のときの構造も同じです。それまでまげを結んでいた人が、急激に西洋化を受け容れていく。太平洋戦争後も、鬼畜米英と叫んでいた人たちが、あつという間にアメリカ一辺倒になつていく。そういう意味で言えば、『なかったこと』にすることによつて、日本人は時代に適応してきたのかもしれない」とあります。

柏崎刈羽原発では五月二十日に、安全性をPRする構内見学が再開されたそうです。中越地震後の耐震工事も終わつておらず、津波用堤防の工事もまだ始まつたばかりだということに：過日、就任早々辞職された鉢呂前経産相が全原発停止前である四月以前に原発の再稼動を容認している発言をされ、電力株が騰がりました。目先のエネルギー不足解消のため、中期のエネルギー政策や原子力安全規制組織が不確定だろうが、ストレステストの検証を終えていなかろうが関係なしに：

原子力や原発に関する知識も薄く、それらを含む日本の社会構造が安易な正義感で変革するものでないことを知りつつも、でも、何か違つてない？違和感を感じてなりません。それは、国や企業ばかりではな

く、私たちが自分の生活を、あの震災前の、原発事故前の状態にそっくりそのまま、元通りに再生することを目指しているように思えるからなのです。

震災・原発事故を「なかったこと」として、それ以前の、不自由さを感じない、便利で快適と思われる生活を取り戻そうとしているのであれば、「自分の子どもに放射能の影響がでないか心配」との言葉に代表されるような福島の子どもの想いを、到底、受け止めたとは言えないのであり、その想いに応えることにはならないはずで

福島の子どもの達のみならず、あらゆる子ども達の未来に真黒の闇をかけてしまったことを羞じる。懺悔する。そして、その闇をはらしていく。それが大人の責任であり、今、なすべき仕事なのだと言いつらなければならぬと思います。

保守的現状復帰から、「現状を見直した社会創造」を標榜する。改めて、真宗大谷派なる宗門の存在意義である「同朋社会の顕現・実現」の内実として、そのことを想い、考え、行動することが、同朋会運動五十年、宗憲改正三十年そして、教区御遠忌を迎える時に在る私たちの、一つのあり方なのではないでしょうか。

## 新年度のご挨拶

教区会議長 北條 頼宗

新年度に当たり、ご挨拶申し上げます。

皆様ご承知のように、今春本山におきましては、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が勤修されました。高田教区におきましては、去る八月二日に高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進委員会が開催され、新たな顔触れで、教区御遠忌に向けて歩みを始めたところであります。

開催時期・記念事業の内容等々、具体的な内容につきましては、委員の皆様の御意見をお聞きしながら、急ぐべきところは急ぎ、じっくりと進めて行くべきところは、慎重にというふうにご各部会・委員会の話し合いを繰り返しながら、進めて行きたいと思っております。

教区御遠忌は申すまでもなく、一部の人たちによって計画・勤修されるべき法要ではありません。広く教区の皆様の御意見をいただきながら、共に歩んでまいりたいと存じます。

現在のこのような厳しい状況の中、親鸞聖人のお念仏の教えにご縁をいただいた私達がお勤めする御遠忌とは、どのような御遠忌であるの

か？これはまさに、これまでの私共の歩みが問われるとともに、これからの歩むべき方向を示していく事にもなると思存します。よろしく御願い申し上げます。

さて、八月十八日開催の第一四二回通常教区会のご報告をさせていただきます。今回は当局より三十四の議案が提出されました。慎重審議の後、全ての案件が全会一致で原案通り承認可決されましたことを報告いたします。

今回の教区会を終えて、特記すべき事としては、①十六年ぶりに経常費と教区費の御依頼額の算出基準が変更されたこと（均等割は変更なし）②東北地方太平洋沖地震・福島第一原子力発電所事故という大惨事から、この度新たに、被災者支援を継続的にこなっていくための法規が整備されたこと、以上の二点が挙げられると思存します。

紙面の都合上、詳しく述べる事は出来ませんが、詳細につきましては、当局または、組長・選出教区会議員にお尋ねくださるようお願い申し上げます。

今年度も、教区内の皆様のご指導と、さらなるご協力をよろしく御願ひ申し上げます。

## 新年度を迎えて 心も新たに

教区門徒会長 五味川千秋

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌も終わり、心も新たに新年度を迎えることとございます。

去る七月二十七日、例年通り本山近くの緑風荘において、全国三十教区、正副門徒会長会が開かれ、二〇一〇年度決算並びに二〇一一年度予算が審議されました。その他、二〇一〇年度各連区協議会が開かれた結果について話し合わせ、各連区、教区、組についての問題点が話し合われた事です。

翌二十八日には、両堂参拝の後、午前十時より宗務所議場にて宗務総長演説、各参務よりそれぞれ当局方針説明がされました。宗務総長、財務長の二〇一一年度方針説明につきましましては、『真宗』誌八月号に記されております。宗派全体として、

- ① 二〇一二年度同朋会運動五十年に向けての取り組み
- ② 二〇一四年度を目途とした教区・組の改編の取り組み
- ③ 二〇一二年度秋に行われる門徒人数調査について

等、又、当教区におきましても、所長が示された諸教化活動方針等、心を一つにして取り組みなければなりません。

又、教区におきましては、去る八月四日に教区会参事会、五日には教区門徒会常任委員会、八月十八日に教区会（通常会）、十九日には教区門徒会（通常会）が招集され、

三十五議案（教区会は三十四議案）が慎重に審議され決議にいたっております。

次に、全国正副門徒会長会並びに各連区ブロック協議会については、当東北連区におきましては、二〇一〇年六月二日（三日）に山形教区にて、更に十一月四日（五日）には仙台教区（東北別院）にて、いずれも一泊二日で各教区、組、各寺の問題点について話し合われました。各教区によって、これほど教化活動や実施方法に違いがあるかと痛感しました。

いつの会でも、何の会でもやはり、教区・組の改編が大きな話題となります。全国の会でも、門徒会として教区と組の改編移行には一人の賛成者もいないという事、そのような中で、この問題をまとめるのは大変な事です。

又今年度は、十月二十日（二十一日）の二日間、奥羽教区において、そして教区門徒会員の任期前の来春三月上旬に三条教区にて行われる事が申し合わせられ、これで東北七教区全区で行われた事になります。

二〇一一年度も課題の多い中、本山、教区、別院、各組の諸事業計画を審議し、理解し、関係各位心を一つにして宗務の発展を願うものであり、門徒会として協力いたす事は云うまでもありません。どうぞ皆様方健康に留意され、門徒会をお引き立てくださいます事お願い致します。二〇一一年度念頭のご挨拶と致します。

**第142回教区会（通常会）及び第57回教区門徒会（通常会）報告**

下記議案について慎重審議の結果、可決され承認されたので報告いたします。

- 第1号議案 2011年度宗派経常費御依頼額算出基準案
- 第2号議案 2011年度宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌・真宗本廟両堂等御修復懇志金御依頼額算出基準案
- 第3号議案 2011年度高田教区教区費御依頼額算出基準案
- 第4号議案 2010年度高田教区経常部歳入歳出決算書
- 第5号議案 2010年度池の平青少幼年センター会計歳入歳出決算書
- 第6号議案 2010年度高田教区出版会計歳入歳出決算書
- 第7号議案 2010年度高田教区共済会計歳入歳出決算書
- 第8号議案 2010年度高田教区聖跡顕彰会計歳入歳出決算書
- 第9号議案 2010年度高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進事業特別会計歳入歳出決算書
- 第10号議案 2010年度高田教区真宗教化研鑽室「聞思学場」特別会計歳入歳出決算書
- 第11号議案 2010年度高田真宗学院会計歳入歳出決算書
- 第12号議案 2011年度高田真宗学院会計歳入歳出予算
- 第13号議案 2010年度高田教区役宅運営会計歳入歳出決算書
- 第14号議案 2011年度高田教区役宅運営会計歳入歳出予算
- 第15号議案 2010年度高田教区特別事業積立金会計計算書
- 第16号議案 2010年度池の平青少幼年センター施設整備積立金会計計算書
- 第17号議案 2010年度高田真宗学院運営積立金会計計算書
- 第18号議案 2010年度高田教区伝道車積立金会計計算書
- 第19号議案 2010年度高田教区共済積立金会計計算書
- 第20号議案 2010年度高田教務所員転退職慰労金積立金会計計算書
- 第21号議案 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けて高田教区で実施した教化活動の点検報告書に関する件
- 第22号議案 高田教区御遠忌法要計画策定中間報告書に関する件
- 第23号議案 高田教区教化委員会規則の一部を改正する規程案
- 第24号議案 高田教区教化委員会内規の一部を改正する規程案
- 第25号議案 高田教区真宗教化研鑽室「聞思学場」規則の一部を改正する規程案
- 第26号議案 高田教区東北地方太平洋沖地震・福島第一原子力発電所事故被災者支援会計規程案
- 第27号議案 2011年度高田教区経常部歳入歳出予算
- 第28号議案 2011年度池の平青少幼年センター会計歳入歳出予算
- 第29号議案 2011年度高田教区出版会計歳入歳出予算
- 第30号議案 2011年度高田教区共済会計歳入歳出予算
- 第31号議案 2011年度高田教区聖跡顕彰会計歳入歳出予算
- 第32号議案 2011年度高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進事業特別会計歳入歳出予算
- 第33号議案 2011年度高田教区真宗教化研鑽室「聞思学場」特別会計歳入歳出予算
- 第34号議案 地方協議会委員の同意を求める件
- 第35号議案 教区門徒会常任委員補充員互選の件（教区門徒会のみ）



# 聞思学場

— 研究生意見発表 —

## 三年間の聞思学場を終えて

第六組浄照寺 増村 俊一

二〇〇八年十月に始まった「聞思学場」の第一期が終了した。この三年間で私は何を学んだのかを振り返ってみたい。

「聞思学場」というこの名称は『教行信証』の総序の中の一文、「聞思して遅慮することなかれ」に由来している。その名称の通り、最初の一年間は、『教行信証』の後序を学ぶことから始まった。御流罪八百年を終えた直後の事、居多ヶ浜での法要と上越文化会館で行われた記念大会で、たくさんの参列者の前でこの後序の一部を朗読させていただいた私にとっては、誠に意義ある講義であった。時間をかけて後序の内容を掘り下げていく。一年目の講義は、何故、御流罪八百年を契機にこの「聞思学場」が始まったのかを理解させてくれた。私達が今、住んでいるこの越後の地に宗祖親鸞聖人が流罪になったことで浄土真宗が生まれたという事実を私は改めて理解した。それは後序を深く掘り下げていくこと

によって明らかになる。

二年目からは、東本願寺教学研究所編集の『正信偈』をテキストに「正信偈」を学んだ。「正信偈」は言うまでもなく『教行信証』、行巻の最後にある七言百二十句の偈文である。大著である『教行信証』の中のエッセンスを集約したものであれば、当然、「正信偈」を深く理解する為には、『教行信証』の中を、あつちに行ったり、こつちへ来たりと縦横無尽に行き来しなければならぬ。二年目からの井上室長の講義には毎回、驚かされた。一例を挙げてみよう。「即横超截五悪趣」の七言一句の講義の例である。室長は『真宗聖典』の中から三箇所取り出された。まずは、信巻から横超、横出を説明する箇所

「横出」は、正雑・定散・他力の中の自力の菩提心なり。「横超」は、これすなわち願力回向の信樂、これを「願作仏心」と曰う（『真宗聖典』一三七頁）

さらに信巻の「横超断四流」の箇所

「横超」は、すなわち願成就一実田満の真教、真宗これなり（『真宗聖典』二四三頁）

次に、化真土巻から

「横超」とは、本願を憶念して

自力の心を離るる、これを「横超他力」と名づくるなり。これすなわち専の中の専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。

（『真宗聖典』三四一頁）

この他にも「愚禿鈔」へ跳んだり、「嘆徳文」に跳んだりして講義を進めていかれた。おそらく、大谷大学の真宗学の授業は、こんななんだろうなあーと思わせる講義だった。それにしても「横超」——横に超えることが、何故こんなにも重要なのか？最後に井上室長が出された善導の積がポイントとなつて私は、ストンと理解できた気がした。「善導曰く、岸上の人には浄土教はわからない。つまり涅槃は河の中洲のようなもの。激しい流れの中にいる者には中洲に涅槃はわからない。川の外の安全な岸の上からはわからない。「横超」とは、川の流れの中で、もがき苦しみながら、その中洲に上がる事である。」と講義された。毎回、こうなので、『真宗聖典』を活用するという事はこういう事なのかと、驚きと共に納得したのだった。

「聞思学場」のスケジュールは、夜七時に集まって、嘆仏偈、念仏和讃、回向の勤行をして、約二時間の講義の後、研修員による座談があ

る。三年前の開講式の時、井上室長より「聞思学場」の名称の由来は、「善導の「信不具足」の三重の定義から来ている。」という説明があった。

信にまた二種あり、一つには聞

より生ず、二つには思より生ず。

この人の信心、聞よりして生じ

て、思より生ぜず

（『教行信証』化身土巻

『真宗聖典』二五二頁）

座談は、人の言葉を聞くことが大切であるという事を私達、研修生が理解する必要があるということだったのだろう。座談に限らず、私達は日々の生活の中でも、妻や子供、親、ご門徒、友人、様々な人の言葉を聞く事が大切なのだろう。そして何よりも宗祖の言葉を聞く事が大切な事なのだろう。毎朝の勤行で「正信偈」を読むのは、読むのではなくて、聞いているのだと思うようになってきた：かな？

「聞思学場」の第一期生は、二十代、三十代の若い人が中心で、五十代の私は異質な存在だったと思う。しかし、そんな私も受け入れてもらえて充実した時間を過ごすことができた。井上室長はじめ、金子・鎮西両指導、それから一緒に学んだ研修員の皆様に感謝したい。

## 聞思学場に身をおいて

第十二組專徳寺 松村 弘

私が以前、会社員をしているときによく先輩、同僚から言われたことがあります。それは「松村君ってあんまり人の話聞いてないよね？」ということでした。当時から自分の中に強い意見や考えがあるか、もしくは自分がまったく興味のないことだと、他の人が言うことには耳を貸さないというあまり良くない癖が自分にはあったようです。

ただ、そのことが自分の中で問題なのでは、という意識はそれ以前からあったように思います。私は大谷大学の短大の仏教科から真宗学科に編入学したのですが、その試験の設問に「あなたは何故真宗学を学びたいのか？」というのがありました。とっさに、実家に帰ってお寺を継ぐためかな、はたまたもうしばらく親元を離れていたからかな、と浅はかな考えも頭をめぐりました。そんな中でそれまでの二年間の学びを思い返してみますと、結局なにか一つ身につけていない自分に気がついたのです。二年間の集大成として提出した卒業研究は「弥陀の誓願」という

テーマで書き上げましたが、ただ言葉と並べて書いただけのものであった気がします。何故だろうと考えてみますと、それぞれの学びを自分のこととして聞いてこなかったからか、ではないか、と思つたのです。大学生になったころは、初めて親元を離れて一人暮らしを始め、見聞きするものがすべて新鮮で外からの刺激ばかりに夢中になり、自分の中に問題意識を持つことが煩わしく思えた気がします。結果として、どんなに授業で自分のことが問われていたとしても自分のこととして聞いてこなかったから、まったく自分にその学びがひびいてこなかった訳です。設問にはその考えを素直に書き、自分のこととして聞き、問うていくためにもさらに学びたい、ということを書き、編入学することができました。試験に通つたことで自分の考えがそう間違ったことではなかったのかな、という思いがありました。日々の生活の中で徐々に自分自身を内観する気持ちが薄れていったような気がします。

聞思学場では聞くということと思ふことが非常に大切である、と教わりました。私自身がそうですが、日々の生活に追われていると知らず知ら

ずのうちに大きな変化を望まない様になつてきます。そんな中でお話を聞きに行くということになつても聞きっぱなしになつていくことが多いように思います。以前聞いたお話で親鸞聖人の学問は聞思の学である、と教わりました。審慮思（つまんびやかに思ひみる）・決定思（このことだと決定していく）・動発思（きまつたら動く）。ややもすると自身の安住と保身に走つてしまう私ですが、そこには何の感動もなく、響きもない。その事に気づかせてもらつてやつと聞法をしていく私になれるのだ、聞思学場に身をおいてやつとそう考えられるようになりました。聞きっぱなしになつていて、聞いた事が自分の身になつていないという事は、自分が勝手に決め付けた事を頼りに生きていくということですね。自分中心で一生懸命生きていくつもりになつていくのです。如来を信じず、自分を信じて生きていくという事になると思います。結果、自分ではどうにもならない事ばかりが増えて悩みが深くなつてきているように思います。

聞思学場では「正信偈」を学んでいます。そこからは宗祖の歩みを学ぶ事が出来ます。その歩みの道は、

雪中につけられた一本の道のように感じられます。私がまだ幼い頃、大雪になると道の除雪が行き届かなくなり、集落内の持ち回りで人力によつて道がつけられていました。一晩で身が埋まるような積雪になつても翌朝だれかしらのご苦労によつて道が作られていたのです。そんなご苦労も当時の私は知るよしもなく学校に通つていました。雪の中の道付けは、自分だけが歩ければよいといったものではありません。しっかりと後にその道を通る人のことを考え、踏み固めながら進んでいくのです。当然時間も普段の数倍かかります。振り返つて考えますと両親の、また近所の方のご苦労によつて育つてきたのだなと頭の下がる思いです。「正信偈」は親鸞聖人がたどり踏み固めてきた道をしめしているように思います。講義の中で誰が無量寿如来に「帰命」するのか、というお話になつたとき、「正信偈」に、

一切群生蒙光照

〔真宗聖典〕二〇四頁

また最後に

道俗時衆共同心

〔真宗聖典〕二〇八頁

との呼びかけがあるから「我等」といえると教えていただきました。親

鸞聖人は、「我」ではなく「我等」と呼びかけられることによって後に続く人に確かに道を示されたのだと思います。

聞思学場に身をおき「聞けない、聞かない」自分が「正信偈」に学ばせていただき、これから学ぶべき方向性がやつと定まってきたように感じます。

聞思学場第一期修了式  
・第二期開講式



第一期修了式

第一期の修了と第二期の開講にあたって

聞思学場室長 井上 円

六月二十一日、草間法照先生の公開講演会終了後、その場で聞思学場

一期研修員十二名の修了式を行ないました。この三ヶ年を掛けて、宗祖の「正信念仏偈」の講義を、金子正美・鎮西良昭両指導の力添えを得て、一応の完結を見ることができて、安堵しているというのが実感です。この間、毎月の講義、毎年池の平での一泊研修会・公開講演会、そして昨年の上山研修と重ねてきました。

講義を聞くだけの研修ではなしに、座談や法話実習も取り入れ、『響法流』の執筆や別院の御命日の集いの講師も担当することで、人の前に臆することなく立たなくてはならない姿勢というものを、身に付けてもらえたのではないかと思います。教区内の各寺院の皆様には、是非お講や報恩講などの布教師として招聘していただき、修了生をさらにお育ていただくことを特にお願いたします。

七月七日、聞思学場第二期の開講式を挙行し、八名の研修員を迎えることができました。この度の御遠忌の「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という基本理念は、真宗の門徒が常に憶念すべきことという視点に立ち、今回のテキストを『宗祖親鸞聖人』に選定しました。三年間を通して、はつきりとした宗祖像というものを、一人ひとりの上で確立しても

らいたいと考えています。各研修員を送り出して下さった皆様に、深く感謝いたします。

聞思学場第一期修了者

- |              |     |
|--------------|-----|
| 藤島 直 (第一組)   | 圓照寺 |
| 水嶋 聡 (第一組)   | 光徳寺 |
| 古海 景雲 (第五組)  | 林正寺 |
| 藤戸 真史 (第五組)  | 覺真寺 |
| 横山 英一 (第五組)  | 寶善寺 |
| 滋野 憲史 (第六組)  | 善念寺 |
| 増村 俊一 (第六組)  | 淨照寺 |
| 渡部 勝子 (第六組)  | 長圓寺 |
| 渡部 秀明 (第六組)  | 長圓寺 |
| 豊島 信 (第六組)   | 西光寺 |
| 春日 智昌 (第十一組) | 高源寺 |
| 松村 弘 (第十二組)  | 專徳寺 |



第二期開講式

センター活動報告

第十二回「新緑の池の平とバードウォッチング」



五月十四日から一泊二日の日程で、第十二回池の平バードウォッチングが開催されました。

今年例年より開催時期を早めた事と、雪解けが遅かったことで、若葉の繁りも無く、探鳥観察には適した日程となりました。しかし、冬鳥が帰った後と、夏鳥が来るには少し早い時期でもあり、鳥の種類は例年より少なめであったことは残念でした。

二日間とも天候に恵まれ、林を吹き抜ける爽やかな風を感じながらの探鳥会となりました。

最後に記録として「鳥合わせ」で確認された鳥を掲載いたします。

青サギ・カルガモ・キジバト・アカゲラ・コゲラ・ツバメ・イワツバメ・キセキレイ・ハクセキレイ・サンショウクイ・ヒヨドリ・ウグイス・キビタキ・コサメビタキ・コガラ・ヒガラ・ヤマガラ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・カワラヒワ・イカル・ニユウナイスズメ・スズメ・ムクドリ・カケス・ハシブトカラス・ノスリ・アオゲラ・コムクドリ・ノジコ・ゴジュウカラ・アカハラ・クロツグミ・オオタカ・ハヤブサ

(声)：エゾムシクイ・オオルリ



## 愚僧のつぶやき

今回はお香を見てゆこうと思えます。お香は現在でも香典や香儀等と表書きして仏前にお供えます様にも仏前にお香を用いる事は、古代インドの生活習慣からきているといわれています。インドは非常に暑い国で、体臭や家の中の臭気を消す為にお香が盛んに用いられ、特に大切な人をお迎える時は、香を焚いたり香を体に塗ったりして清めるのが礼儀であった様です。そうした習慣が仏前莊嚴に取り入れられたのは、ごく自然な事でありませんが、『香は信心の使い』といわれる様に、上質な香りが我々に浄土を願う心を起こさしめる助縁になることを願うてもありません。又、良い香りが部屋中に行き渡る事を通して、『老少善悪の人をえらばれず』という仏のお心を感じてお念仏申される事があります。そして浄土のお香には、匂い以上の香りがある事が教えられています。『本当の香り』という仏典童話に、こんな話があります。

くみ取りの仕事をするニーティーという少年は、その臭い

が体にまで染みついてしまい、誰も彼に近寄らず寂しい思いをしていました。そんな彼にお釈迦様はこう語りかけるんです。『ニーティーよ、人の嫌がる仕事にいそむ心、それがあなたの本当の香りなのです』と。

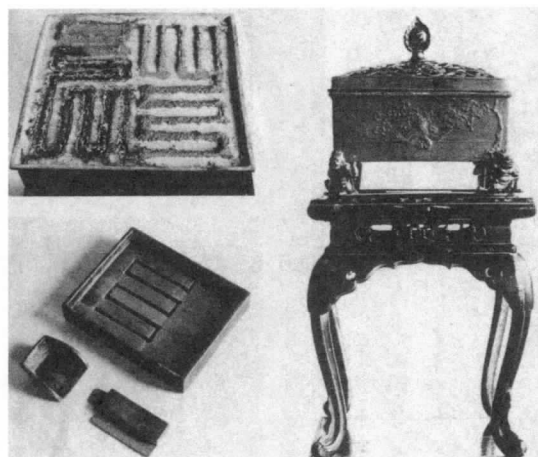
そこには自分に与えられたご縁を精一杯果たしてゆこうとする人には、内面からにじみ出る香りがあると。そして浄土のお香には、『ご縁を生きよ、我もおるぞ』と呼びかける仏のお心が込められている訳です。だからこそ親鸞様は、浄土を生きるその人を、『染香人』と呼んで拝んでいかれた事でもあります。

又、『なぜ真宗では、線香を立てないんですか』という質問がありますが、線香は禅宗と共に中国より伝わり、修行等の時間を計る為に立てたといわれています。ただ線香が普及するのは江戸時代以降であり、それまでは粉末にしたお香を灰の上に盛って、その先に火種を置いて燃香していた訳です。その代わりに便利な線香が出来たのですから、寝かせるのが自然でありましょう。又、昔

は葬儀の時に線香を一本立て、その煙りが真つすぐ上がれば成仏、揺れたら迷っているという迷信がありました。だから寝かせる線香を見るにつけ、『迷信に惑わされない確かな信心を頂け』という先人の願いを感じ手が合わされる事があります。

(ペンネーム 維摩教信)

常香盤 近代 京都 妙心寺



左上・香印押形盤  
左下・香印を作る道具



# 参加者のひびき

## 差別問題研修会 はじまりは利害？

第一組本立寺 渡邊 智子

『信仰の中の差別性』—いわゆる

「下寺」問題を例として—

このテーマは馴染みが薄いという事もあり、当事者である私なら平気であつても、そうでない人からすると神経質になる点があるかもしれない。が、研修会を通じて確信した事は、問題はそんな個人的・感情的なものではないということでした。資料の中の一部、昭和四年の中外日報の記事を紹介します。

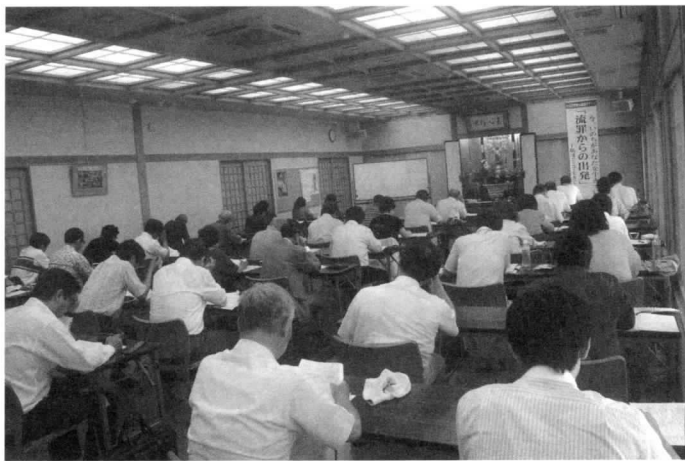
「付属寺問題だけでも解決至難で条例改正は一〜二年かかる大谷派（付属寺下寺）」「大谷派の新宗憲に伴うて行わるべき条例制定に関して下問参務の話によると仲々そう手軽に運べないということである。（略）最も多いのは新潟県だそうであるが、付属寺を切り離して全部独立せしめると本寺の生活が脅かされるのもあり、或いは本寺・付属寺の双方の立場によって切り離しの利害が錯綜して、付属寺で切り離しを喜ばぬ

向きやら本寺が切り離しを望むものもある。どちらにしても現行法令による時には、付属寺の独立には本寺の同意を要するのだから事実の進行に非常な支障を生じてくる。（略）一夜漬けで法令だけを作る事ならやつてやれぬこともないが、事実にあたるそう簡単にかぬのだから一〜二年の日は要すであろう。」

研修会のテーマは「信仰の中の差別性」でしたが、信仰以前の利害というのが不気味な説得性を持つ言葉でもありました。この記事だけを見ればまるで本寺・付属寺の利害関係のようですが、元をたどれば全体の体制の中にもっと大きな意図があると講師の長田氏は指摘されます。下下があるのは逆に最上があるということなのだ。そのようにして権威が作り上げていっているのだとすると、教団内のこの格差による利害こそが人の信仰心さえもおかしくしていると思わずにおれません。

長田氏の生まれ育った能登の元下寺では、先代住職が死の直前に寺格をお金で買い、飛檐地から准由緒地へ八段階格上げさせたということでした。その気持ちは私にはわかりませんが、それにしても胸が痛くなる事件です。大金を積んで一生のかた

きうちをするような、一体何に？そして真宗大谷派で何故こんな出来事が起こるのか？しかしこれは間違はなく教団内事情によって起きた出来事なのだと痛感しました。ほんの一世代前の出来事ならば現在も、まだまだ私達は危い中にいるということでしょうか。



## 教区門徒会員研修会

教区門徒会副会長 吉田 勉

去る、六月十三日、高田別院を会場に本年度第三回目の教区門徒会員



研修会を、第五組真住寺住職 藤戸秀庸氏を講師にお迎えして、会員二十三名の参加で「同朋会運動のこれから」という講題で研修会が行われました。

私はこの研修会で、今般の御遠忌法要を縁として、今日の少子化、核家族化が進む現代にあつては「お内仏を中心とした家庭づくり」、お念仏を中心とした家庭ファミリーとしての家の、新しい家庭の形成が大切と考えさせられました。

同朋会運動は単に本山や寺を建て直すという寺院経営のための運動でない。自信教人信の精神によって「住職が本当の住職になる」「寺が本当の寺になる」「門徒は本当の門徒になる」信仰に立った運動かと思われる。

### 推進員研修会 報尽為期碑を学ぶ

推進員連絡協議会長 八木 司



教区推進員連絡協議会の一泊二日の研修会を六月九日～十日に行いました。研修テーマは「明治の両堂再建と献木・尾神嶽雪崩殉難事故」です。各組から三名の参加者を募り、三十六名の受講者となりました。

九日十三時、研修会場のスカイピア遊ランドに集合。マイクロバスで二十七名の眠る報尽為期碑に移動。杉本教務所長を導師に、参加者全員でお勤めを致しました。報尽碑の丘からは、青葉の木々の向こうに雪崩の現場が望めます。当日の講師、上野實英師から遭難の様子、碑文の内容について説明を受け、報尽碑を後にスカイピア遊ランドに会場を移しました。改めて開会式、教務所

長からお話を頂き、上野講師からは「吉川区下川谷黒姫神社境内の櫛の献木と搬出、雪崩遭難の顛末」について十七時半まで内容の濃いお話を聞きました。

十日は、六時から朝のお勤め。八時から藤原駐在教導の「本山御遠忌と教区の展示ブースの準備・上山期間中の体験」などお話し頂きました。九時半から閉会式。帰路の無事を祈りながら参加者を見送りました。

### 「男女平等参画を 考える会」に参加して

第七組法泉寺 虎石 薫

任を与えられて参加したのだが、残念ながら、私は男女平等参画について、未だに個人的な経験に基づいてしか意見を述べられない。宗祖聖人の教えに照らして、真宗大谷派宗憲に照らして、日本国憲法に照らして、歴史的経緯に照らして、学術的見地に照らして、社会的意義に照らして、自分の見解を発するには、あまりにも勉強が足りないことを実感している。

ところで、七月に行われたFIFA女子ワールドカップで、なでしこJAPANが優勝したことは記憶に新

しい。チームを率いた佐々木則夫監督が、コミュニケーションを図る際の基本姿勢は「横から目線」。上の立場から言いつけるのではなく、下の立場から迎合するのではなく、同じ土俵に立つて意見を交わし、チームの舵取りをしてきたそうだ。『横から目線』でやりとりすることは、なかなか容易にできるものではない。相手への敬意と感謝の念を常に持ちちなのだろう。根本的に「人間が好き」なのだと思う。

私は、この『横から目線』を重んずる機会に恵まれる。「男女平等参画を考える会」でも、その機会を得た。この経験を活かすためにも、やはり、もっと勉強しなくてはいけなかったな、と反省している。



男女平等参画を考える研修会 (6/11)  
講師 南枝 尚美 師

### 得度研修会一泊研修 「得度一泊研修に参加して」

第六組等正寺 稻清水 覚

ぼくは、六月四日五日と青少年センターで得度一泊研修に参加しました。

一日目は、衣のことを学びました。初めて着物と衣を着たので、着方が分からなくて、先生に手伝ってもらいました。とても動きづらくて、あつかったです。



そして衣やけさには、色々な種類があることを教えてもらいました。むずかしかつたことは、じきとつ下のひだをなおす時に、手をどこにいれたらよいのかわからなかつ

たことです。

二日目は、キンと、しょうこう作法を、学びました。キンの打ちかたはかんたんでした。でも、キンをならさずばちを、しまうのは、むずかしかったけど、なん回か、練習するとうまくなりました。しょうこう作法は、少しむずかしくてふたをしめる時に、ふたが重かったです。

京都に行つて、得度した後も、わすれないようにしたいです。

### 青少年キャンプ



足湯を楽しむ

### 初めて青少年キャンプに来て

中三 小林 賢也

中学生最後の夏、僕はこの青少年キャンプに出れて、とてもよかったです。参加者として、最初で最後のキャンプになってしまいました。でも、楽しくて、うるさくて、ケンカが多くて、何しゃべってるかわからないなど、すごくさわがしい班だけ

ど、だからこそ、このキャンプは、いい思い出になりました。



野尻湖でカヌー

そして、このキャンプで、一番楽しみにしていたカヌーでは、思っていたより難しく、直進が大変でした。ただこぐだけでは、風や波ですぐ回ってしまい、他のカヌーとぶつかってばかりいました。それに右と左のこぎ方が違っていたので、直進するようにしていいたら、だんだんと直進できるようになりました。これもカヌーの指導をしてくれたヨシさんのおかげだと思えます。そして、今度は、野尻湖へ家族とカヌーを乗りに行きたいです。

このキャンプは、真宗宗歌などが

あつて、初めはとまどいもあつたけど、とてもいい経験になりました。また来年、スタッフとして、行きたいと思えます。

# おめでと〜ございます

## 婚儀

- 第一組 圓照寺様
- 第三組 正光寺様



第1組 圓照寺様 婚儀

## 本堂改修

- 第一組 正覺寺様



第1組 正覺寺様 本堂改修完工報告法要

# キッスふくしま サマーキャンプ イン たかだー2011

第三組安専寺 老野生淳一

三・一一のその時刻、僕は中央自動車道山梨県大月市を過ぎたあたりを東京に向け走行していました。地震発生と共に高速道路は閉鎖、残り七十キロを九時間かけ目的地に到着したのは翌日になってから。休む間もなく妻子を乗せて帰路につきました。道路事情で関越道を通り、関越トンネルを抜けてしばらく経った午前四時頃、車は一瞬コントロールを失いました。「雪でスリップしたのかな？それにしても変…」、じきに体勢を建て直せたものの本当にヒヤッとなりました。長野県北部・中越地方を襲った地震のせいでした。帰り着いて眠る間もなくご門徒の法事を勤めて、僕にとつての長い長い一日が終わりました。

ることは…、と考えている時にふと頭に浮かんだのが、毎年行われている二泊三日の「教区夏の青少年キャンプ」でした。外で自由に遊べない福島の子どもたちを招待し、その後を有志寺院でホームステイしてもらうというのはどうだろうか。



そんな思いを杉本教務所長、北条教区会議長に伝えたのが六月下旬。それから早かった！七月五日に実行委員会開催、独立した事業として実施することになり、具体的な提案がなされました。それまでの所長、保倉主任以下教務所員、関係者の奮闘ぶり（もちろん子どもたちを自宅まで送り届けるまでそれは続きます）には本当に頭が下がります。

子どもたちの募集では金子光洋氏と仙台教区仏青、とりわけ会長の二本松市の眞行寺・佐々木道範氏が精力的に動いてくれました。二十八日、二本松市での現地説明会に向かったものの大雨で引き返すというハプニングもありましたが、八月二日、約四十名の小学生たちは長旅の疲れも見せず高田別院の境内に降り立ったのでした。

前半のホームステイでは十二ヶ寺に分宿、それぞれのステイ先であたたかいてもてなしを受けたことでしょう。他の寺院でもそうだと思いますが、受け入れに当たっては様々な方面へ働きかけ、快く協力を得ることができました。当安専寺でも、県立海洋高校の実習船「くびき」によるクルーズや、バーベキューで使う魚介・野菜の寄贈など多々あげられます。

後半の合宿生活で笹ヶ峰での川遊び等自然を満喫できた様子は報道等でご存知の方も多くおられると思います。

六日朝、四泊五日の日程を終えてバスに乗り込む子どもたち、短期間ながらも夏の楽しい思い出作りに貢献できたかな？でもその子どもたちの多くが長袖に着替えていたという事実、子どもたちの置かれている

現実の厳しさを垣間見た気がしました。

今回行きがかり上実行委員長という役を仰せつかりましたが、僕としてはこの事業でみんなが費やした全エネルギーの何万分の、何十万分の一しか貢献できてないことは知っています。でも僅かながらでもその一翼を担えたこと、今後十年にわたり教区としてこの事業を継続していくきっかけを作ることができたことに深く感謝いたします。

最後になりましたが、本事業の実施に当たり陰に陽にご協力いただいた関係各位に対し甚深い敬意と謝意を表すると共に、福島原発事故が収束し、子どもたちの笑顔が戻ってくる日の一日でも早からんことを心から願わずにはられません。

## ホームステイ先寺院

光徳寺（水嶋聡住職）、圓照寺（藤島直住職）、光榮寺（老野生義常住職）、安専寺（老野生淳一住職）、正光寺（高橋良弘住職）、養性寺（内山順恵住職）、林覺寺（直江智成住職）、善念寺（滋野憲雄住職）、照蓮寺（藤原馨住職）、西光寺（豊島弘住職）、最賢寺（金子正美住職）、専徳寺（松村公雄住職）



高田教区震災支援有志会の活動報告

○これまでの活動概略

四月九日～十日

石巻市総合運動公園へ二トントラックで物資の輸送。

五月十日～十一日

石巻市住吉小学校へおでんの炊き出し(二百人前)

五月二十六日～二十七日

石巻市飯野川第一小学校へ鍋ご飯、筍汁の炊き出し(二百人前)

六月四日～五日

岩手県陸前高田市にてNPO法人ふくひ災害ボランティアネットワークの「復興支援新αプロジェクト」に参加。

六月十六日～十七日

石巻市寄磯小学校へ五目御飯、豚汁、鳥唐揚げの炊き出し。(二百人前)

七月十三日～十四日

石巻市寄磯小学校へ五目御飯、ポトフの炊き出し。(二百人前)

七月二十七日～二十八日

女川町女川第三小学校へ五目御飯、肉じゃが、味噌汁の炊き出し(百人前)と無料バザー(物資提供)

八月三十日～三十一日

石巻市寄磯小学校へ五目御飯、つみれ汁、肉野菜炒めの炊き出し(二百人前)と無料バザー(物資提供)

有志会の活動をとおして

高田教区震災支援有志会事務局

第六組西光寺 豊島 信

目の前に転んで倒れている人がいる。

すぐさま手を差し伸べる人。

声だけ掛ける人。

周りからいい人だと思われようと思つて助ける人。

後ろめたさを感じながら通り過ぎる人。

助けている人をあいつは偽善者だと中傷する人。

自分の体が不自由で、手を差し伸べることができない人。

今度は転ぶ人がないようにと手すりを付ける人…。

さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし

わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおも

うとも、百人千人をころすこともあるべし(『歎異抄』)

三・一一以降、私は復興支援に向けて、大きくこぶしを高く突き上げる



8月31日 寄磯小学校(避難所)

ような思いでいたわけではない。わがかながらに自分には何ができるのか

と、もやもやしていたところに仲間から声をかけてもらい、その思いに心動かされ、現在に至っているにすぎない。私が被災地に行くことができ

るのはまさにご縁でしかない。私が被災地に行くことは、行っている

私の後ろにある数えきれないほどの多くのご縁の上にちよこんどのつかつ

ているだけのことのように思う。わがこころの良くて行っているのではない。

先に挙げたような縁が来れば、どの立場にも私はなり得るだろう。

私たちは必ず正当な理由をつけて、どこかの立場に身を置いて、そうではない立場のものを批判する。「支援者」「被災者」といったことばも同じことだと思う。「支援する」というこ

とをいったん横に置いて、被災地の声に耳をすまし、人対人として向き合うところから始まるのだと思う。

私たちの活動は今のところ「仙台

仏青のお手伝い」というスタイルをとっている。彼らの地道な活動のお陰で、避難所や仮設住宅での活動において私たちが直接非難や中傷を受けたことはない。しかしながら善意の押し売りになってないか、生活の邪魔をしないか、自分だったらどう思うだろうか…、不安はいつもつきまとう。そんな不安をよそに、

私たちの想像もつかない深い悲しみや苦しみを背負っておられる方々から、「また来いよ」「今度来たら○用意しとくから」といわれると、目頭が熱くなるのを抑えきれない。

この活動は実際のところ、炊き出しに関して言えば、距離にして約五百キロにもなる途方もない広範囲にわたる被災地の中のたった一ヶ所、

二百人程の方のわずか「一食」を月に一、二度提供しているにすぎない小さな小さな活動だ。これでよいのかと迷いな

がら、訪ねながら関わって

いくより他ないと

感じてい

る。



女川第三小学校(仮設住宅)

教務所からのお知らせ

●おみやみ申しあげます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第十一組 西玄寺前住職 渡邊 利丸

第十三組 光徳寺前住職 篠原 芳麿

●おめでとうございます

◎住職任命

第十三組 船入寺 細井 憲久

◎得度式受式

第二組 寶善寺 島倉 琉登

第四組 隨念寺 更山 寛和

第四組 敬音寺 白銀 保子

第四組 敬音寺 白銀 藍

第六組 等正寺 稲清水 覚

第六組 照蓮寺 藤原 朋子

第六組 照蓮寺 藤原 顕信

第十一組 寶惠寺 藤田 光代

第十一組 寶惠寺 藤田 凌央

第十三組 淨嚴寺 坂井 典子

第十三組 淨嚴寺 坂井 真心

「響流」編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。

着任挨拶

書記 辻本 怜



このたびは、八月十一日付にて高田教務所書記を拝命

いたしました辻本怜(つじもとさとし)と申します。

私は二〇〇七年三月に大谷大学真宗学科を卒業した後、宗務役員として本山宗務所に入所し、前任地は小松教務所にて勤務しておりました。この高田教区で勤務させていただいてから、まだ一月程であります。教区の方々から熱心に教区運営に取り組まれておられる印象を強く感じました。この様な活力ある教区で勤務させていただける事は、大変光栄な事であるとありがたく思っております。

私自身はまだまだ経験の浅い身であり、皆様方にご迷惑をおかけする事もあると存じますが、皆様方のお言葉を有り難く受け止めながら頑張っていきたいと思っております。何卒よろしくご指導いただきませう。皆様お願い申し上げます。

退任挨拶

岡崎教務所書記 中川 正見

このたび、八月十一日付で岡崎教務所書記に任命され、高田教区を離れることとなりました。六年三ヶ月という長きにわたり、教区の皆様にはお世話になり、本当にありがとうございました。

高田教区は、初任地ということもあり、皆様にご迷惑ばかりかけている中、あたたかい言葉をかけていただけました。高田の方々の優しさに甘えてしまった面もあったかと思いますが、それを支えにがんばれたと思います。

また、高田在任中には、御流罪八百年法要、宗祖七百五十回御遠忌をはじめ、別院行事、教区行事を皆様と共に迎えてきたことは多くを学ばせていただいたと同時に私にとつてかけがえのない大切な思い出です。

最後に、高田在任中に主事任用試験に合格できなかったことは残念に思うとともに申し訳なく思っておりますが、いつの日か主事として皆様とお会いできる日を目標に岡崎でもがんばりたいと思います。ありがとうございました。

◆こもれび◆

真宗僧侶になる決意をして五年が過ぎました。現在は人生八十年、九十年といわれますが、私が物心ついた頃は今より二十年は短かったと思われまので、私も既に人生の終盤に入ってきたということになります。

近親者、先輩の方、同級生までも次々とこの世を去っていきます。この年代になりますと、肉体的にもいろいろと故障が出てまいりまして、今日は内科、明日は外科と病院通い、知人と会った時も、「体調はどう」が挨拶になっていきます。

「生、老、病、死」親鸞聖人が仰られたとおり、この世は火宅無常です。僧侶になる以前の三十年余りの娑婆世界での経験も活かし、門徒の皆様と共に「不滅の光」を求め続けたいと思えます。

原発問題も来年早々には第二段階も完了する様です。新年には被災地に希望の光が見えてくることを願います。私事で恐縮ですが自身の体調も回復しますように…。(草間)